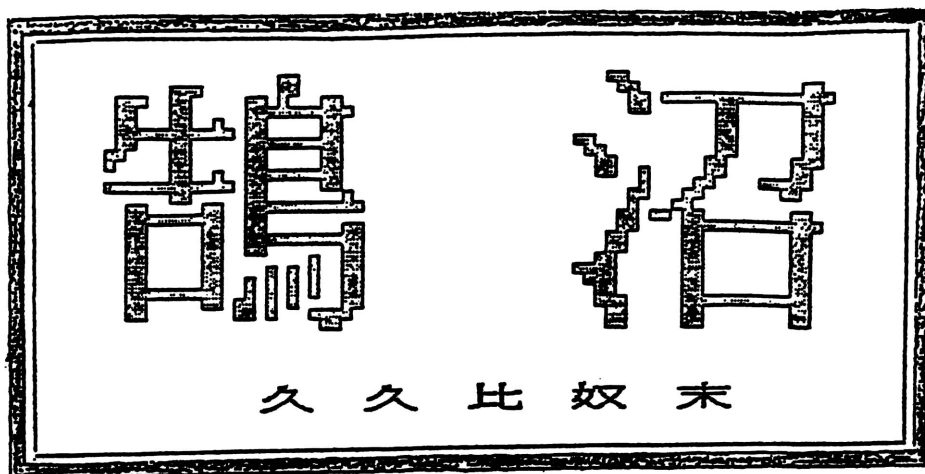




はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 4 5 号

1 9 8 8 年 1 1 月 8 日

相州鵜沼邑文学 網野 菊 塩沢 務

鵜 沼 を 語 る 会

相州鶴沼邑文学 (三)

塩 沢 務

(1) 網野 菊 のあらまし

明治33年1月16日～(1900～)小説家。東京麻布生れ。父龜吉、母ふじのの長女。家は馬具製造販売業。39年赤坂尋常小学校に入学の年、母、家を去る。翌年「二度目の母」、かま、来る。私立千代田高女在学中、国語教員伊藤康安先生、国語作文の才を認められた。大正5年日本女子大英文科に入学。大正8年(1919)年末から正月にかけての冬休みの二週間を卒業論文書きの名目で、同級生と同伴鶴沼海岸、慈教庵尼寺で過ごす。大正9年英文科卒業。20才、12月「秋」国文館より自費出版。母校の同窓会団体「桜楓会」機関紙「家庭週報」の編集部勤め、翌年からは英語の授業にも当った。「婦人公論」の懸賞短編小説に応募「蕎麦の種子」を発表(大10)この年義母死去。

11年4月早稲田大学露文科に聴講生として在籍。夏義祖母、弟妹たちと鶴沼で間借りして過ごす。12年第三の母、汎子を迎えた。湯浅芳子とともに福島県の信夫高湯に滞在中、関東大震災があり、帰京の途次、「一期の思い出に」(自筆年譜)、京都粟田口に志賀直哉を訪ねた。生涯の師である。先生の紹介で14年文芸春秋、「家」文芸日本、「声」を発表した。早大聴講をやめる。15年中央公論、「光子」発表。昭和2年改造、「統一の手紙」発表3年義母死去。祖父朝吉死去。女人芸術、「ネッディ」発表。4年、第四の母、来る。5年、「早急な結婚と共に満州奉天に居住。改造「慶子と祖父の死」発表。6年満州事変起る。志賀に送った「異邦人」が相原菊子の名で文芸春秋発表。7年文芸春秋

「街の子供」発表。11年2、22事件。3月、満州引き上げる、東京に居住。12年単身父の家に移る「懸賞」など書く。13年正式離婚。「妻たち」を書き上げる。15年春陽堂、短編集「汽車の中で」刊行。16年「ことづけもの」「夢」「病氣」「子供」など書く。真珠湾急襲発表あり。17年大阪全国書房、「若い日」発刊。実業之日本社からギヤスケル夫人著「シャーロット・ブロンテ伝」の訳発刊。米国の飛行機東京へ初来襲。18年現代文学、「すて猫」。東見社、「妻たち」。昭南書房、「雪の山」。21年世界、「憑きもの」「新人」「いところ」「曉鐘」「初空襲」「家庭週報」「郵便屋さん」「新文学」「お妾横町」発刊。22年父肺炎で死去。三島書房、「海辺」大正8年ころの鶴沼のよおすが発表されている。

海 辺

12月末という上に薄雲った日なので、早く暮れかけていた。

松ノ木の多い砂地の道には、二人の乗った俵以外には殆ど人通がなかった。前の俵の春子は切りに俵夫と話している。後ろ俵の梯子は、時々風の工合で聞えて来る春子の言葉を聞くとともにしに聞き乍ら、東京の家の事を思った。旅慣れぬ梯子は、東京から汽車で二三時間しかかからぬ此の土地に来て、既に旅愁を覚えるのであった。又、これから訪ねて行って其処で数日を過す筈の尼寺<下鰯5250慈教庵、鶴沼海岸3-12>についての色々の想像が梯子の心を重く押しつけた。

時折松林の間から大きな別荘の屋根だけが見える。小さい橋渡る<海岸通り藤ヶ谷橋（菊本邸前・現在暗渠）>渡る。道を折れる。<大曲>また松林。灰色の洋館が現れる。待合かと思われる様な洒落た造りの別

莊や、低い垣越しに大きな池の見える別荘がある。 駐在所、郵便局、
＜熊沢屋酒店付近＞再び松林。それから道は右に折れて、今度は小さい
店屋が続いた。駄菓子屋、髪床、荒物屋、等々。其の道の突き当たりに
みすばらしい農家風の家が見える。どう見ても其の家より外には尼寺と
見当のつく家はないので、あんな所かと思って、梯子は一図がっかりし
たが。道は両側畑の道にはいった。右側の畑は広く、その向うに松林が
あった。左側の畑は狭く、直ぐ大きな別荘に接し、別荘の中には赤い温
室の屋根が見える。

鵠沼海岸図（大正12年6月）



其の畑道を少し行った右側に小さいもたやが四五軒かたまっていて、其の一とかたまりの屋根の端に一と際高く、寺風の屋根が浮き出ていた「あ、あれだ、今度こそ本当だ。」と梯子は思って安心した。安心すると、今度は此の灰色の空の下静かな道を、此の儘もっと俤にゆられて行きたい様な気持も覚えた。

寺の入口には、真直な松の木が数本立っていて門の代りをしている。極く低い、形ばかりの石段があり、石段の脇にわ「不許葦酒入山門」と堀っ三尺程の高さの石が立っている。

庭はガランとして少し殺風景な感じで、庫裡の前の一本の白梅の花だけが目立った。

本堂にはもう雨戸が閉まり、本堂と向かい合って、渡廊下でつながれた庫裡でも、階下は戸締りがしてあり、唯二階の一間にだけ、障子に薄赤い電燈の光がうつっていた。

「あの二階で暮だすのだな。」俤を降り乍ら其の灯影を見、梯子は心に思ったが、余りにも平凡過ぎる、そしてやや殺風景な庭や庫裡の感じは尼寺というものにロマンティックな想像を加えていた梯子を失望させた。

俤夫達は二人の荷物を持って先きに立ち、庫裡の戸をどんどん叩いたが、中からは答えがなかった。



「浄念さん、東京からお客様です。」俣夫が再び烈しく叩き乍ら怒鳴ると、やっと中から、「どうれ。」という年寄りの古風な答がした。

雨戸がガタガタと開けられて、六十ばかりの尼の顔が現れた。それは今の「どうれ。」という敵めしい答とは似つかぬ、小柄な、愛嬌のある顔であった。老尼は春子達を見ると、丸い小さな顔の目尻に小皺を一杯湛えてニコニコ笑った。梯子はその笑顔を見た瞬間、「こういう顔はどこかで見たようだが。」と思ったが。それが誰の顔であったかは、突嗟には思い出せなかった。余りにも愛嬌のよい其の老尼の顔を見て、梯子は再び予想を裏切られた気がしたが、併し、尼の着ている灰色の着物に「やっぱりお寺に来たのだ。」と思って、安心した。

「まあ、あんたさん方でしたかいな。安井さんとお云いやしたな。」老尼は二人を見比べたが、二人が一緒にうなづくのを見るとニコニコして「まあ、こちらへおはいりなされ。あんたさん方の外にもな、矢張り東京の学校のお人が四人おられますがな。」と云い、「どうだ、知っている人達ではないかな？」と訊く様な表情をした。

老尼の後から、も一人二十二三の、これはずっと細目の、眼のパッチリした尼が、同じ灰色の着物で、物珍しそうに土間に降り立ち、外をのぞいていたが、春子達の顔に出会うと、愛想よい会釈を残して、奥へ引込んでしまった。

広い土間に直ぐ接しして八畳ばかりの座敷があり、その座敷とも一つ隣の座敷とに沿って廊下が流れ、その端が鍵の手に折れて渡廊下になり、本堂に続いているのであった。土間の突き当たりは台所と見えて、そこの暗がりから先刻の若い尼が再び出て来て、二人の荷を座敷へ上げ

る手伝いをした。

春子は改めて尼達に挨拶した。それがすむと、老尼は笑いを顔から引込め、「こちらから差上げたハガキは御覧で？」と訊いた。「いいえ」と春子はかぶりを振った。春子は此の土地に^{馴染}があり、梯子より年上でもあるので、寺との交渉は彼女が一人で引受けていたのだ。

「おや、さやか。いえ、実はな、今、師匠が旅行中でしてな、お客様をお置きするのも私らの一存にはいたし兼ねますのゃが……。それに早四人さんのお宿をして居りますで、それにまた、あんたさん方迄というては師匠に叱られようもしれずと思ひましてな、それで、実はお断りのハガキを差上げたのじゃが、まあ、折角おいでた事ゆえ、兎も角も当分はゴテゴテと皆していいようにお暮しなされて下され、なんならばまた此の近所の家を聞いてみても宜しいよってな。」彼女は左う云い終ると再び愛想笑いをした。

梯子は自分達が歓迎されざる客である事を知ると、気がめいった。併し、兎も角も二階へと云いわれて、二人は席を立った。若い尼が先きに立つて、バスケットその他を持って急な狭い梯子段を昇った。踊り場は二畳ばかりで、板の間にうすべりを敷いた上に、色の黒くなった筆筒が一つと針箱その他の物がゴタゴタと並べてあつた。

二階は表の方が二間で、其の二た間の中の、梯子段に遠い方の部屋に、丁度夕食を終えた四人の女が、電燈の真下にお膳を囲んで話をしていた。春子達の足音をきくと四人は話をやめて一齐に梯子段の方へ視線を向けた。その四人の中の一人の、若い女学生風の女の掛けた縁なし眼鏡が、圧迫する様な印象を瞬間梯子に与えた。梯子は益々気鬱を感じた

「安井さん」四人の一人が春子の姓を呼んだ。「まあ、小川さん」春子はびっくりした声で応じた。小川は座を立てて来た。「矢張り、あなたでしたのね。私、先刻、ここに運ばれた荷の名札をチラと拝見した時、若しやとは思っていたのですけれど。」「まあ、思いがけないわ。どうして、あなた、此処へいらっしたの？」春子はじっと小川の顔に眼を注ぎ乍ら訊ねた。春子に左うみつめられると小川は少しどぎまぎしたが、併し、直ぐ平気らしく笑って、「あなたこそ、どうして此処へいらっしたの？」と問返した。「私？私達は勉強しに来たのよ。卒業論文を書きにあなたは？」「私も勉強にまいりましたの」小川は顔に笑を浮べた儘左う答えた。

二人の荷片附けが終る頃、階下から若い尼が、「お食事をなさって…。。」と云いに来た。「私達はもう済んだんですから、階下へいらっして召し上っていらっしゃい。」と小川は言葉をそえた。

二人が階下へ降りて行くと、例の土間のとつぎの座敷に黒塗りの会席膳が二つ並んでいる。そして其の上のあたりに、薄暗い電灯が細紐で座敷の真中から引張って来られてあった。老尼が給仕した。お椀もお皿も精進料理で、二人の為に特別に炊いてくれたものらしい温い御飯には椎茸や油揚げなどがはいていた。それらは見た所あまりおいしそうには見えなかったが、お寺らしいという点で、梯子を喜ばせた。

梯子はみやげに持参した奈良漬を、先刻門の所で見た「不許葷酒………」云々の文字から、お寺へ上げていいものかどうかとこだわった、結局、春子から出して貰った。「これは結構な物を……」老尼は恭しくその折をおし戴いて、「信教僧信教僧、これを戴いたで、そちらへ。」と

云った。

信教僧と呼ばれたのは、丁度其の時台所から出てきた、一寸見には十五六歳の男の子に見える、がっしりした体格の、若い尼だった。信教尼は老尼の傍らに坐って鹿爪らしい顔で二人に挨拶した後、其の折を捧げ持って次ぎの間に退いた。

食事後、春子は老尼に食費の事など訊ねた。

「皆さん左うおっしゃりますがな。」尼は春子の言葉の終らぬうちに、やや膝を進めて、云った。「ここは宿屋と違いますよってな、これこれだけ戴きますッ、とわ申上あげられませんでな。只、まあ、なあ、お客さんのお志によってな、いか程なと下さるのを戴きますだけで……。」と云って、笑った。「けれども、大抵これ位とおっしゃって戴きませんと……。私達、こういう事に慣れて居りません者同志ございますから…」

「さあ、それはな、お人よって色々ござりますがな。」と老尼は首をひねって考え乍ら、「中には一日で八十錢おいて行かれる人もあるしな、一円おいて行きなさるお人もあるという工合でな。又、今は万事物が高くなっているでと云われて、「これはえろう少ないが。」と云って一円二三十錢よりももっと多うおいておいでのお人もあるしな、また、八十錢位ね、へ……。。」と笑った。老尼は笑いながら顔を動かしたので、丁度顔が電灯の真下に来、湯上りらしいつやつやした小さい顔と頭が灯に反射して、光った。

結局、電灯代と炭代は自分持ちで食費は恩召しという事に話がきまって、春子達は、お湯を貰いに來ていた近所のおかみさんが帰って行くと入替りに風呂場へ行った。

風呂は五右衛門風呂で、湯殿の棚には神か仏かがまつてあって、お燈明があがっている。

風呂から上るとさすがにさっぱりした好い気持になって、二人は二階へ戻ると荷物の中から紙とペンを取出し、自宅や友達などへ手紙を書き始めた。二人が畳の上で書始めたのを見ると、隣の部屋の人達は、それまで取巻いて話していた食卓を持出して来て二人に貸してくれた。

寺の外はしんと静まり返り、その静けさの中を、向いの本堂から木魚の音と念仏の声とが伝わって来る。

春子達は手紙を書続けていたが、そのうち小声で話し出した。隣の室でも最前から低い声で話をしていたが、小川が外へ出て行って時分から、其話声がだんだん声高に弾んで来て、時々その言葉がはっきりこちらの二人へ聞えて来た。「でも先生、私達はもう古い人達なんか待っていませんと思うのです。私達は私達での道をぐんぐん進んで行こうと思うのです。私達の後について来ようとする人は兎も角、そうでない人は構わず私達の後置き去りにして行こうと思うのです。」

暫くすると、隣室でも議論が一段落つき、若い二人は、もう一方の階段——裏座敷の方にあった——から階下へ降りて行った。先生も立上がり、階段の二人へ声をかけた。「あちらの二人にわ私からお話しておきますから。」そして春子達の方へ歩いて来た。「あなた方は××学校のかた達でいらっしゃいましょう？」先生は二人の傍に坐って云った。何を云い出される事かと、二人は固くなった。「そうです。」と春子が答えた。私は〇〇学校専門部で英語を教えて居ります多田と申します。先刻あそこにいらした若い人達は私共の方の学生さん達です。御覧の通

り、みんな不作法者ですから、どうぞ、よろしく。」左う云って多田先生は頭をさげた。「私達こそどうぞ。」二人も頭をさげた。「所で、こうしてお互いに共同生活をいたしますには、矢張り、一定の規則だった生活が必要だと存じますのですよ。私共の方でも今相談いたした所でございますが、あなた方も此処へいらしたのはお遊びにでなくて、御勉強が目的だと存じますから、各自、ひとの妨げにならぬようにせねばなりません。私は長年このお寺には度々参りまして、ここの様子をよく存じて居るのですが、尼様方は我々俗の者の生活を余り快く思っ居られませんようなのでございます。いつぞやも、どなたかここにいらしたかたが大変お騒ぎになったので、それ以来お部屋を貸す事は断ろうなどというお話も出た位でございますしね。何にいたせ、此処に居ります以上は尼様方の生活に私共の生活を順応させて行かねばなるまいと存じますから、いかがでしょう、大体こうきめましては……。」

朝は七時起床。それから各自身支度、部屋の掃除。八時に食事。九時から十二時迄は各自沈黙を守って勉強。午後は自由行動。但し、午前中に話をしたい者は松原——此の附近は松原が多く、景色もよく静でもあるから——へ行く事。夜は五時頃に食事。

「尼様方は二食で、お夕食は召し上がらないので、夜は私共の為だけに食事の支度をして下さって、直ぐに夜のお勤めをなさらなければならぬのですから、私共の方でもお夕飯の時はなるべく余計な手数をかけませんようにいたしたいと存じます。ばらばらに戴きますと、お汁を二度温めたりする様な事になりますから、皆して揃って早く戴くという風にいたしたいと存じます」そして九時に就寝という事であつた。

多田先生の云う事は条理正しいと梯子は思った。併し、疲労やら旅愁やらで心わびしくなっていた梯子は、老尼の言葉で、此処へ来た事を少し悔いる気持ちにれていた所へ、多田先生の言葉をきいて、一層、うっとうしさを感ぜずにいられなかった。梯子は、気楽な所だからという春子の言葉を丸呑みにして、卒業論文を書きにと父母に願って来たのには、継母の許から離れて、友達とだけののびのびした日々を過ごしたいという気が多分にあった。

多田先生の言葉を二人は黙ってうなずいて聞いていたが、先生が次ぎの部屋へ帰るや否や、思わず顔を見合わせて苦笑した。「どうなさる」「どうしましょう？」「帰りましょうか？」「帰るったって、折角来たもの、詰まらないわ。……いいわ、明日は海養院のクリスマスへ行くとして此処にいないし、明後日でも何処か近所の貸間を探してみるわ。此処になかったらK町へ行ってもいいわ。もともと私があなたを此処へ引くっばって来たんだから、大丈夫、私が責任を持ってよ。」

「そんな事ないけれど……。」

「大丈夫よ。此処にだってK町にだって、私、友達があるから。一週間か二週間の事ですもの。どこか、置いてくれる家、あるに違いいわ。」

そのうちに隣の若い二人も戻って来、外へ行っていた小川姉妹も帰って来た。みんな寝支度にかかった。隣の部屋に三人此方の部屋に二人。小川姉妹は少し話があるからと云って、狭い裏座敷の方で床に就いた。たった一つしかない電燈は、二つの表座敷の間の敷居の上につり、襖は少し開けておかれた。

「やこちゃん、あなた、眼か覚めたら起こして頂戴。七時になんか到底

起きられない。」

「私も朝起きは苦手だわ。朝御飯ぬきにしても寝てたい方なんだから。」 隣の室の若い二人は元気な調子でこんな事を云い乍ら、布団を引きかぶって寝て了った。梯子は、隣の二人が梯子以上に朝寝坊らしいので案外に思った。先刻の多田先生の言葉は、では多田先生一人の考えだったのか、と梯子は思い、少し気が楽になった。

本堂の念仏の声はいつの間にか、やんでいた。ひっそりした静けさの中に、近くの海の波音と松風の音が入りまじってサーッサーッと聞え、時々、遠くで汽車の音がした。裏座敷の小川の姉妹は、風邪気らしく、しきりに苦しそうな咳をした。

梯子は夜半度々眼を覚した。その度にボタンボタンという微かな音が耳についた「木魚の音かしら？」と思って耳をすましてよく聞くと、それは軒から庭に落ちる雨だれの音であった。

朝起きて見ると、外は本降りになっていて、庭の地面は水気をいっぱい吹きこんで黒ずんでいた。

其ひは二五日で春子は梯子を連れてC町の海養院という療養所のクリスマス二行く事に前からきめてあった。春子は女学校卒業後、今の学校に入る迄二三年其の海養院で病氣療養に過ごした事がある。院長は基督教信者で、病人にその宗教を強いたりはしなかった、治療上宗教的なものの必要を認めて、院内に日曜学校風なものをつくっていたりした。毎年十二月二十五日に殊更クリスマスとは云わずに医王祭として其の日を祭り、その日には曾て在院した者達をも招待する慣らいになっていた。

梯子は其の療養院に就いてもロマンティックな想像を走らせていて、春

子からクリスマスの日の催しの事を聞き、同伴をすすめられると、喜んで承諾したのであった。併し、二十五日の朝になると、持ち前の億劫がりから、亦、昨夜の多田先生の言葉から、昨日来て今日直ぐ遊びに出かける事が気兼ねになったりして、梯子は海養院行きに気乗りしなくなった。梯子は幾度も窓の戸をあけては雨を見た。春子は梯子の性質をよく承知しているので、何でもかでも梯子をせき立てて支度をさせて了った。不断着ばかりしか持って来ない梯子に、春子は自分の紋附の羽織を貸し、尼から番傘を一本借りて寺を出た。

砂地の道は雨にしめって、歩く度にザクザクと音を立てた。二人は一つ傘の下に低い駒下駄の表と白足袋とを汚さぬ様に注意しながら歩いて行った。少し行くうちに俣宿の前に出、そこから二人は俣に乗った。俣は、すがすがしく雨にぬれた朝の松並木の間を気持よく走って行った。人通りのない松ばかりの道をゆれて行く時、梯子も、「出かけて来てよかった。」と喜んだ

俣から電車、それからまた二た停車場の間だけ汽車で行きC駅で下車した時には、いい塩梅に雨はあがっていた。C駅には海養院行きの客をあてこんで、俣が沢山集っていた。二人もその中の俣に乗って、一里近くの田圃道をゆられて行った。

療養院の大広間ではもう会が始まっていた。正面の壇の上にわ大きなクリスマス・ツリーが立ち、中央に十才ばかりの男の子が、何か演説をしている。壇の前には長椅子が幾つも並び、多くの男女の患者、其の知人、看護婦などが腰かけ、会場に人の出入りの気配のする度に、それらの人々の眼が一斉にドアへ向いた。

春子は一番後の椅子に坐ったが、直ぐに、眼ざとい患者や看護婦達にみつけれられて、あちこちからの目礼やほほ笑みへの応酬に忙しかった。

少年の演説がすむと、色の黒い、土地っ子らしい子供達の一群が壇に登って、賛美歌をうたった。

春子はあちこちへ会釈や目礼を返していたが、そのうち、ふと、会場の右隅の椅子に腰かけている年とった院長の眼に会うと、春子は急に笑を引込めて、取りすました顔で頭をさげた。院長も、苦笑した顔で、それに答えた。

大広間でのプログラムがすむと、一同は海べりの庭に設られた第二会場へと、ゾロゾロ流れ出した。初めての者にはどこをどう行っているのか分からぬ程に広い病舎の廊下をあちこちと抜け、オゾン療養所の細長い建物のそばを通ったりして、梯子は春子の後から海辺の丘へ出た。其処にはもう人が一杯集っていて、白い天幕張りの幾つかの小屋の前は賑やかだった。洋風料理、焼き芋、おでん、甘酒、豆乳、南京豆などの模擬店が杉の葉其の他思い思いの飾りをつけた看板をあげていた。店員には院長の息子達や医局の人達になっていた。

模擬店は豆乳の店以外は直ちに売切れになった。丘の下の人数はだんだん減っていった。春子達も他の二三の患者や看護婦達と一組になって丘を下り、海辺へ出た、人の丈け程の小松が立ち並び、海辺まで続いていた。梯子は、夜其の松並木を越して聞えるであろう波の音を想い、患者達をいたましくて、別れがたい気がした。

梯子は本院の方へ帰って来ると、「五時二十分の汽車があるでしょう？あれで帰ろうと思うけれど、どうだか、まだハッキリきまらないわ。

二十分の次ぎは何時？」「五十五分です。」「左う。それは一寸困るわ、院長が東京へ帰るのが其の汽車らしいから、一緒になると面倒くさいから、二十分のにするわ。」

それで二人はB川の方へ出かけた。

一旦晴れた空がまた曇りかけて、川の水は暗い色を帯びていた。川べりの蘆は薄赤ばんでいた。春子は梯子の先に立って灌木の茂みや雑草の中をふみ分けて行った。春子は、此の川辺に多くの思い出を持っている、川下の方へ歩いて行くうちに雨が降って来た。川の面に波紋がポッと立つ、それが次第に繁くなるのを見て、二人は病院へ引き返すと先刻頼んでおいた俵が来たからとしらせに来る、××から電車に乗って行く間に、春子達は時候外れな雷鳴を聞いた。

「こんなに遅くなって、尼さん達や隣の先生はどんなに思うであらうか？」左う思うと、梯子は余計に悲しくなり、一と汽車おくらせた春子が恨めしくなる。

寺に着いた時には、梯子は泣きたいのを通り越して、絶望的な気持ちになっていた。併し、尼達は二人の帰りの遅いのを少しも怒っていなかった。只、心配していただけだった。三人の尼は俵屋の声を聞くと直に一斉に立って来て雨戸をあけ、二人を見ると安堵の声をあげた。梯子はそれで救われた感じがし、彼女達に心から感謝した。真暗な夜道を無事に運んでくれた俵夫達に対しても、ありがたく思った。その俵代は法外に高いものであったが……。

寺の近くの小川^にかかった、小さい白塗りの橋を渡って少し行った所で多田先生は、一人で松原で勉強したいから、といって四人と別れた。

四人は再び、今度は少し大きい川を渡って、高い砂山の並んでいる海岸へ出た。川にかかった細い板橋を渡る時、梯子は一番あとに成っても渡りえず、はだしで下駄を両手に持って当惑していたので、三人にアハアハ笑われた。

砂山と砂山との間を通って行くと海岸に出る。其処で四人は二人ずつに別れた。

晴きった日の事で、いつもは見えるか見えない位に遠い、沖の大島がハッキリ見えた。其の左り手のやや手前には、江の島が群青色の波の上に鮮やかな影を落していた。右手の岸伝いの平塚町、大磯あたりも手にとるようによく見えて、近くの松林の中には、昨日春子と訪ねた海養院が白く小さく点在している。富士も白雪におおわれた上品な上半身を中空に現していた。

春子と梯子とは一つの砂山の近くに坐って貝を拾ったり小石を集めたりしていた。松子とやす子は、春子達からずっと離れた波うちぎわに仰向けに寝ころび、熱心に話していた。沖から舟が帰って来ると、そこらに散らばっている網をほぐしたり干したりしていた子供達が急いで寄って、舟を引き上げる手伝いをする。

本堂では相変わらずポクポクポク木魚の音が聞える。尼達は、おつとめの合間には、食事ごしらえや掃除の外に、施物のほどこ物、洗濯、縫い物等で忙しかった。梯子は机に向っている時、いつか知らぬ間に尼達の生活について考えている事が多かった。

尼達の生活は、此処へ来る前に想像していたものとは全然違っていた事は事実だった。そして現実味からずっと遠いものに考えていた。が、

尼達は全く普通の女のように生活しているのである、在家のおかみさんや娘達と同じように。実科女学校を出て、継母のために此処へ逃れて来たといふ若い千代尼（千代尼は頭は丸めているが、まだ僧号が貰えず、俗名のままだった）にも、年とった浄念尼にも、浄念尼の姪に当るといふ信教尼にも、髪を剃り、衣をつけ、木魚を叩いてお念仏をとええという事以外には、特に尼らしい特異性が見られぬ様に梯子は思うのであった。

梯子は朝早く眼がさめると、そ起き裏座敷へ行った。着物をきかえて音のしない様に窓をあけて見ると、お寺の裏手が一面畑になっていて、其の畑に白い霜がうっすり降りている。畑の向うは松林で、畑との間には、海岸へ行く小道が走っている。松林の、海岸寄りのはてには別荘風の家が一軒と粗末な藁屋根の家が二三軒かたまってあるばかりで、それらの家の上のあたりの空に、雪に包まれた富士の上半身が朝日に薄赤らんで浮んでいる。松林の前の小道を海岸の方へ農夫が馬をひいて通っていたが、それが見えなくなると、あとには人影は一つもなくなって、松も畑も家も富士も、冬の朝の空気の中に音なく静まり帰っていた。梯子は、むさぼるように、その静けさに心をひたそうとした。

梯子はこっいう静けさをこれまでに、どんなに求めていた事だろう！梯子は此処に来てから今迄に勉強らしい勉強をしていない事を省みて、悔いを感じた。急に、いら立ちを感じ始めた。

「みんなの寝ているうちに一と勉強しておこう。」左う考えて手早く髪を結び、追われるような心持で歯磨と手拭いを持って階下へ行った。湯殿の前の廊下へ行った。千代尼が手を真っ赤にして雑巾をかけていた

が、私を見ると急いで、汲みたての温いのととりかえに行ってくれた。

二十九日の朝松子が静岡の自宅へ帰るというので、他の四人は駅まで見送りに行った。五人はお昼少し前にお寺を出た。駅前の洋食屋で食事をした。

駅に入ると、汽車はじきに来た。一番後ろ三等車に乗り込んだ松子は汽車が出るまで窓から首を出して四人の方を見ていた。汽車が出て了々と、多田先生が町で柳行李を買うのをつきあってから、一同は帰路についた。××停留所で電車を降りてからお寺までの道を四人はゆっくり廻り道などし乍ら歩いて行った。ぼかぼかした、いいお天気でみんなの気持がのんびりしていた。道には、松ぼっくりが沢山落ちている。多田先生は松つぼくりを拾い拾い歩く。「先生そんな松ぼっくりをどうなさるんですの？」春子が訊いた。「×町にいる友達の所へ持って行こうと思ひましてね。松ぼっくりはいい焚き付けになるのですよ。友達は×町で自炊していますからね、大変に喜びますよ。」「それじゃ、手伝っあげましょう。」と云って皆で拾いにかかった。

松子が発った次の日、春子もお正月をしに東京へ帰った。春子が立つ時、やす子と悌子はおみやげにいろいろな注文を出した。大船のサンドイッチ、オスシ其の他をたのんだ。

昼食後、悌子はやす子と二人で海辺へ云った。海に、今年の名残りを惜しむ、気持が二人ともあった。海では、小さい波がザーッと寄せて来ては、また、ひいて行く。その小波がまだもとへ帰り切らぬうち、一段と小さな小波が押し寄せて来て、前の小波にぶっかり、まごまごしていると、後から、やがてぐんと大きな波が迫って来て、それらの小波をさ

らって行つて了う。

「御覧なさい。江の島があんなにハッキリ綺麗に見えるわ。」

やす子の指す方を見ると、成程、江の島は、鮮かな青みをふくんだ波の上に、いつもよりも一層近く、少し緑を帯びた黒さで浮んでいた。「行ってみましょうか？」と梯子は云った。

やす子はまだ一度も江の島へ行った事がなかった。梯子はかねて春子から、浜伝いに片瀬町へ行けると聞いていた。そばに子供を遊ばしていたお婆さんに道を訊ねると、浜伝いに行くと片瀬川へ出るから、そこで渡しに乗って片瀬町へ行けと教えてくれた。二人が礼を云って歩み始めるとお婆さんは、後から、「私共は一人二錢ずつで渡してくれますが、よその土地の人だと見ると、高く取るかもしれませんよ」と注意した。暫く行くと、小川へ出た。それは片瀬川ではなく、より小さい別の川であった。やす子達の前を歩いていた二人連れの男は、着物の裾をはよってドンドン渡っていったが、やす子達は足をすくわれそうで、二人は引き返して、停留所へ出て、電車で行く事にした。片瀬町で電車を降りると、二人は江の島の方へ行かずに、片瀬町を通過して、七里ヶ浜の方へ歩いて行った。町にはさすが大晦日らしく、小さな松や竹の正月飾りが立っている。二人は話に夢中になって歩いた。或る療養院の前まで来ていた。「下へ降りましょう。」

やす子は先きに立って、細い道を磯へ降りて行く。梯子は話しかけていた続きを声高に云い乍ら、其の砂道をやす子の後から降りていった。

社会の話から文学の話、絵の話、音楽の話。

二人は、下の砂地へ出ると、そこに坐って。話しても話しても話しつき

なかった。

やがて時間がおそくなったのに気づき、ようよう立上ったが、快い興奮は二人から去らなかった。二人はあちこちの道を通って行くうち、いっか、大きな砂山の上に出ていた。それを降って海岸伝いに栈橋へ行った。橋を渡って江の島へ行ったが、もう四辺がうす暗くなっていたので二人は奥までいかず、引返した。

其の夜、三人尼はお互いに剃刀をあて合って、綺麗になった頭を光らせ乍ら、暗い電燈の下で余念なく明日の支度にかかっていた。とりわけ、若い千代尼は、冷たい感じがする迄に青々と剃った頭をうつむかせて、熱心にナマスを刻んでいる。他の尼達も子供らしい喜びを明らかに顔に出していそいそ立振舞っている。尼達を見た時感動し涙ぐんだ。

梯子は、階下の庖丁の音や尼達のはしゃいだ声などを聞くと、ふっと涙がこみ上げた。「明日は暗いうちに起きて海辺へ行って日の出を見にね。」梯子は子供のような熱心さでやす子を誘った。「提灯、今日のうちに借りておきましょうか？」左う梯子が心配そうにやす子に云うのを聞いて、多田先生は笑いだした。

「大丈夫ですよ。提灯なんか、持たなくても。」

「私、そんなに早く起きられないわ。」やす子は幾らか不平そうに云った。

梯子が目覚めた時には四辺りまだ暗かったが、本堂の方からは既に念仏の音が聞えていた。しかも今朝は三人総出と見えて、いろいろな声が入りまじって高々と聞えて来た。梯子は、ねむがるやす子を起こして海岸へ行った。

松林を通過して小川を渡り、更にも一つ川を越えて砂地に出ると、漸く四辺が白みそめた。海から来る風が心地よく二人の顔にふれて、そして過ぎて行く。他の空の部分も海も一様に暗い中に、唯、東の空だけがうす赤んでいる。トツプリと濃い色をした波は、は大様に岸に迫って来てはドシリと砂地にぶつかって碎けた。

二人は静かに黙って立った　儘、波を見たり空を見たり、黒く眠っている江の島を眺めたりして、太陽の現われるのを待った。ふと、梯子は後を振り返った。二人の外誰もいないと思っていた海辺の、二人から少し離れた所に、砂上に並んだ舟の一つのかけにかくれるように寄りそいながら、土地の者らしい十六七の少年が一人、矢張り日の出を待ち乍ら立っている。

東の明るみが増して、海の上の一部と傍の片瀬川の上にキラキラと赤い光がきらめき始めた。同時に、西方の空に聳える富士を中心に、一連の山々の中腹から頂にかけて明るい光が流れそめた。その明るさは、太陽の昇るにつれて増して行った。中でも富士が一番美しかった。それは如何にも晴れやかな、そして快活な美しさであった。やがて海一面が明るくなり、あたりの家や松林も眠りから覚めたように浮び出て、砂地には二人の影がハッキリとうつるようになった。

二人は帰途についた。わざわざ遠廻りをして庵へ帰ったが、途中、二人は、早起きと興奮との疲れから、口をきかずに歩いていた。

庫裏の縁側に十二三の、袴をはいた少女が一人で遊んでいたが、二人の姿を見ると、急いで家の中へかくれて了った。

お雑煮を祝うと、元気が回復したので、梯子は机の前に坐って本を読

み始めた。一年のことぎめをするような心持だった。

ボンボンと、どこか遠くの方で万歳の鼓の音がする。時々階下から先刻の少女の唱歌の声や物を云う声が聞えて来る。その少女の声はお昼少し前頃から聞えなくなった。

お昼、お膳を下げに千代尼が来た。「したへいらっしてたお嬢さんはお客様ですか？」「三河からでございます。」と千代尼は答えた。

少女は、或る貴族の娘でからだが弱いので三河の国にある此の庵の本寺にあずけられているのだが、今日は新年なので、片瀬町の別荘に来ている両親に会うため、一人の尼につきそわれて此处へ来たのだった。声が聞えなくなっているのは、先刻片瀬町から迎いが来て、そちらへ行ったからである。

この話は無事で退屈気味の二階の三人の好奇心をそそった。其の令嬢は本当に健康のためだけで田舎のお寺にあずけられているのだろうか？

外に理由はないのであろうか？ そんな事を三人は語り合い、考え合うのであった。

夕方、三人で散歩に出かけ、上屋という旅館の前まで来ると、向うから信教尼が年始の回礼をすませて帰って来るのに出会った。信教尼は、鹿爪らしい顔で衣の袖を胸で合わせて歩いて来たが、三人を見ると真面目な顔の儘で、おじぎをして過ぎた。其の後姿を見送り乍ら、多田先生は、「信教さんは若く見えますね。とても二十歳とは見えませんね。」と云った。「あら、二十歳なんですか？まあ！」他の二人は、余りの意外さに、笑い出してしまった。信教尼は、どう見ても十四五歳にしか見えなかったが、成程左う云われてみると、顔は二十歳らしい顔をしている

と梯子は思った。

夜るの食事にはお蕎麦がでた。信教尼が赤い顔をほてらして二階をあがつたり降りたりして給仕をした。二度目にあがって来た時に多田先生は、「信教さんはどうして出家なさったの？」と訪ねた。「十五の年に此処へ叔母の浄念の手伝いにまいりまして、お師匠様のありがたいお説教を伺ったら、やにむに、出家したくなったのです。」と信教尼は答えた。そして、「やはり、運命ごとでございましょうな。」笑いもせずにつけ加えた。

四日の夜、やす子と梯子とが火鉢をはさんで本を読んでいると、外の暗い庭の方で、突然、念仏の声が起こった。その、変にしゃがれた声で「なむあみだぶなむあみだぶ。」と二た声、早口につぶやくように云うのを聞いた時、梯子は「浄念さん、変な声を出して……。」と思い、クスクス笑った。やす子も同じようにクスクス笑った。二人が一緒になってクスクス笑っていると、その念仏のぬしが、「浄念や浄念や。」と呼んだ。「ハイハイ。」

本当の浄念尼の声があわただしく返事をして、雨戸がタガタト開けられた。

二階の二人はハッとして本から眼をあげて顔を見合わせた。二人は其の儘黙って暫く階下の物音に耳をすましていたが、「なむあみだぶなむあみだぶ。」と先刻の念仏の声が再び今度は二人の真下の部屋で起こるのを聞くと、やす子は不意に、「恐しい恐しい。」と云って、子供のように身を縮めた。平常多田先生から「お師匠さんはそれはそれは厳格なかたですよ。」と聞かされていたので、二人は、大尼を、どんなに恐ろ

人かと思っていた、そこへ今の念仏の異様な声で二人はスッカリおびえて了った。

翌朝、梯子が眼を覚ますと、もう階下からは大尼の太い、しゃがれた男のような声が続けざまに聞えて来た。それに混じって、年とった浄念尼や若い信教尼の「ハイハイ。」と答える声が絶え間なく聞えて来る。それらの声を聞いているうちに梯子の心は沈んで行った。この頃中ずうっと元気になっていた心がくじけて、長い間の習慣の陰 なたな気持が頭をもたげて来た。

やす子も今朝は珍しく早く眼を覚ました。二人は起上るには起上ったが、顔を洗いに降りる勇気が出なかった。そっかといって二階にいつ迄もぐずぐずしているわけには行かないので、お師匠さんが本堂へ行ったと見るや、梯子は大急ぎで階下へおりた。

本堂に続く廊下の張出しの所で、梯子が大急ぎ顔を洗って、洗った顔を拭こうと手拭いに手をかけたたん、本堂でしていた例の念仏のしゃがれ声が突然近くなったので、梯子はビックリして手をとめ、声の方へ顔を向けた。と、本堂と庫裡との間の渡殿を、頭も衣と同色の灰色の頭布で包んだお爺さん一全く、お爺さんという感じだった一が、気むずかしげな顔をして、飛ぶような早さで渡って来る。梯子は思わずドキッと、取りかけた手拭いを下に落して立ちすくんだ。が、大尼は梯子には眼もくれず、相変わらず飛ぶような足どりで其の儘廊下を左へ折れて大尼の居間になっている離れの新座敷の方へ行って了った。

その日の午前中というものは、二階の二人はろくろく階下へおりずに机にしがみついていた。大尼は絶えず誰か彼か呼び立てている。「浄念

や浄念や。」ト呼ぶかと思うと、「千代や千代や」という。そうかと思うと、二十になったという信教尼を「小僧小僧。」と呼び立てるのである。そして、その合間合間には、ひとの心をキュッとおさえつけるような咳ばらいと念仏の音がするのである。「まるで口やかましいお姑さんみたいだ。」と梯子は思った。

お昼頃、昨日隣の別荘に引越して来たという家の奥さんがお寺へ挨拶に来た。大尼はその人を本堂に通すと、大きな声で、「小僧小僧、お茶を差し上げろ。俺が東京から買って来たお煎餅を半分程差し上げろ、半分よりちいっと多めに差し上げ。」などと、しきりにどなっていた。

隣の奥さんが帰ると間もなく、大尼はどこかへ出掛けて行った。二階の窓から梯子がそっと見ると、大尼は門の所まで行ったが、何か考えついたと見えて引返して来た。そして本堂の横まで来ると立止って、「小僧小僧」と呼んだが、其の儘、またスタスタと歩き出して門から出て行ってしまった。本堂で少し早めな調子で木魚を叩いていた信教尼は「ハイハイ。」ト答乍ら、あわてて障子を引開けて出て来たが、もうその時には大尼の姿はどこにも見えず、信教尼はあちこち見廻しした後、キョトンとした顔をして本堂に引込んだ。梯子、それを見ていて、庫裡の二階で一人クスクス笑った。

午後、尼達は残らずそろって本堂に集り、お経をあげた。お経の間も大尼は相変わらず、梯子をドキットさせるような咳ばらいをしたり、何かブブブッ小言みたいな事を云ってたが、本堂にはさすがにふだんとはまるで異った空気があった。全ての尼の声が緊張していた。

尼達のとなえるお教の文句は梯子の方へもハッキリと聞えて来た。梯

子は聞くとともにしに其の經に耳を傾けた。

「又舍弗、極樂国土には七宝の池有り、八功德水其の中に充満せり」
それは浄土の美しさを徳くお經であった。庭をこえて高らかにひびく尼達
達の声を聞き、その美しい浄土の形容をきくうちに、私の心は緊張し、
なんとなし悦びにみたされた。

「青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光あり、
微妙高潔なり。……又舍利弗、彼の仏の国土には常に天樂を作す。黄金
を地と為す。昼夜六時に曼陀羅華を雨らす。」

弟子はじっと机の前に端座して尼達と一緒に本堂に坐っているような
心持ちで一心に耳をすました。

「舍利弗、若し善男子、善女子有りて阿弥陀仏を説くを聞きて名号を
執持すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若
しは五日、若しは六日、若しは七日一心不乱ならん。其の人命終る時に

もろもろ しょうじゆ とも

臨みて、阿弥陀仏諸々の聖衆と与に其の前に現在したまう。是の人終る
時、心顛倒せず、即ち阿弥陀仏の極樂国土に往生することを得。舍利弗
、我是の利を見るが故に此の言を説く。若し衆生有りて是の説を聞かん
者は应当に発願して彼の国土に生ずべし。」

今日此のお經の一句を聞いただけでも此処へ来た事はよかったと思っ
た。

思いがけなく大尼が上って来た。ふと襖の開く音に何気なく振返った

顔の直ぐ前に灰色ずくめの太尼の男の老人のような姿を見出した時、やす子と梯子はハッとした。二人は無意識的に座を飛びのいて、自分達の敷いていた座蒲団を二人とも、太尼の方へおしやった。併し、太尼、それを斥けた。「いやいや、俺は蒲団なぞ要らん。あんた方、お敷き。若い者は冷えてはならん。」左う云って太尼は無理に二人に敷かした。

「これはな、昨日東京から買って来た煎餅じゃが……。」太尼は首桶でも抱えるようにして持っていたお盆の上の紙袋を二人の前に差し出し乍ら云った。そして、二人が口を開くのを待たずに、「実は昨夜挨拶に上ろうと思ったのじゃが、あんた方、寝てしまわれたでな……。それでな、今朝あがろうと思うていたら、又、お勤めやらでひまがなく、遅なわった。なんせよ、此処は『寺』と云わずに『庵』と呼んでいる位でな、いわば尼達の修業場じゃ。そういうわけじゃで、定めし、あんた方も不自由に思われる事も多かろうが、まあまあ堪忍して大目に見ておいてやって下され。いい年をし居り乍ら一向に知恵が廻り居らん。くにの寺には、もうちょっとましな人間も居るのじゃが、じゃによってな、どうか、あんた方もな、そのつもりで大目に見て居ってやって下され。俺からも、よう、したの衆に云うてはおくが、あんた方も、構わずに気をつけてやって下され、な。」左う云って太尼は立上がった。

二人は階段口まで見送ろうとしたが、太尼は、「いらんいらん。」とおしとめて、一人、トボトボと暗い梯子段を降りて行った。

「いいお爺さんねえ。」やす子は大尼の姿が見えなくなるや否や小声で云った。「あら、お婆さんだわ。」梯子が訂正した。「半分よりちいっと多い目にお隣の奥さんに上げたでしょう！それとも、信教さん、半

分だけにしといたのかしら。」左う云って梯子はおかしがった。

大尼の訪問並びにお煎餅のおかげで、やす子はスッカリ元気を回復した。其の夜、二人はいつもよりも却って夜更かしをした位だ。

朝、充分朝寝をして、ゆっくりと起きて顔を洗いに降りると、千代尼が大急ぎで台所からお湯を持って来てくれた。今迄は水だったのだ。食事のお膳には、珍しくも亀甲色の大切の奈良漬が幾片もついて、本然尼や千代尼が入れ替り立ち替わ来て給仕した。海辺へ散歩にいった帰って来ると、浄念尼が、待ち構えていたように直ぐ、「甘酒」を持って上って来るし、午後には午後で、或る貴族の後室の寄進いう薩摩薯がお盆に山盛りになっておやつに出た。

夜、梯子がお湯にはいっていると、座敷で大尼が、「おかげんを伺えおかげんを伺え。」とどなった。と、風呂場の裏口と廊下口の戸が一時に開いて、「おかげんは？」と、千代尼と信教尼の顔が両方から出て云った。「結構です。」梯子は笑いをかみしめて、左う二人に答えたが、二人の顔が引込むや否や、ふき出した。そして、湯槽の中で一人笑い乍ら思った、「こういう工合なら、十日すぎ迄もいたい位だ。」

「アスカエル」五日の晩、春子から電報を受け取ったので、六日の朝起きると直に春子を迎える支度をした。色々春子をびっくりさせる様な趣向を室にこらしておいて、わざと留守にするために二人は海岸へ出掛けた。

海岸には、珍しく漁師や其の子供達が集って地引き網をしていた。新年の休のあとの仕事始めと見えて、その人達は常よりも一層緊張した顔をしていた。いつもやす子達の姿を見ると直に悪口や下品な言葉をはき

かける子供達も、今日は、「俺達はこの通り働いているぞ。」と言わんばかりの顔をして二人の方をちょいちょい見乍ら、熱心に大人達の手伝いをしていた。誰も彼も真面目になって一心に太い綱をたぐっている。赤銅色にやけた、張り切った腕や体を見ているうち、梯子は、あのお経の文句を思い出した。「若は一日、若は二日、若は三日、一心腐乱ならん。其の人命終る時に臨みて、阿弥陀仏諸々の聖衆と与に其の前に現在したまう。」「本当に左うだ。普断、どんなに下品な言葉を吐いてもいい、どんな生活をしてもいい。真剣な生活を皆が持ちさえすれば、それでいいのだろう。」梯子は其の人達の仕事を熱心に眺めていた。

浜から帰って見ると、てっきり戻って来ているものと思っていた春子の姿が見えなかった。二人はガッカリした。殊に梯子は、東京の家に来た年始状其の他を春子に持って来て貰う筈になっていたのに、一層ガッカリした。

ふと外で俵がとまり、階下の尼達に物を云う春子の快活な声が起った。梯子とやす子が大急ぎで暗い裏座敷にかくれた。春子は二階へあがって来たが、少しも驚く様子がなかった。二人の方で根まけして現れ出た。春子は「まあ、ひどいわ。」とか、「随分だわ。」とか云ったが眼は少しもそういう表情を示さず、「なんだ、子供っぽい事をして……」やす子達の方が自分で自分達のいたずらをおかしがって、中々笑いやまなかった。その翌日、梯子達も急に東京へ帰る事になった。梯子は、やす子が帰った上に大尼も上京するのを見たら、早く東京へ帰りたくなった。「此処で送った二週間、それは私が初めて予想していたものとは、なんと違っていた事だろう、意義のある生活であつたらう！。

「鵠沼」昭和63年11月45号

昭和63年11月8日発行

海 辺 網野 菊

(学習用冊子部数35部)

発行所 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸2-10-34

電話 33-2001

編集 鵠沼を語る会代表塩沢務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33

電話 36-7876